

令和 2 年 7 月 15 日現在

機関番号：21201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K20756

研究課題名（和文）糖尿病透析予防指導の質向上のための支援システム構築に向けたアクションリサーチ

研究課題名（英文）Action research for building a support system for improving the quality of diabetes dialysis prevention guidance

研究代表者

藤澤 由香 (Fujisawa, Yuka)

岩手県立大学・看護学部・講師

研究者番号：60711942

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：糖尿病透析予防指導における看護の実態調査から地域の診療所等における糖尿病透析予防指導の充実の必要性や医療連携の重要性についてより具体的に検討していく必要性が示唆された。糖尿病透析予防指導における看護の課題解決に必要な支援は、日々の看護における困難や看護者自身の課題の明確化、看護者が抱える課題解決を支えるリソースの紹介、日々の看護における困難や課題に関わる事例検討等を通したリフレクションの促進、複数いる研究参加者個々の課題の明確化、組織の目標設定の明確化と共有の支援、課題解決がスムーズに進まない場合の介入計画の修正、再立案、遂行のサポートが必要であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

糖尿病透析予防指導における看護の実態について、全国的な透析予防指導における看護の実践状況と課題が見えてくること、多くの課題を抱えていることが予測される透析予防指導における看護の課題解決に向けて、大学教員と臨床実践者の協働によるアクションリサーチを実施し、その過程を明らかにすることで、各施設が抱えている各課題の解決に必要な支援の具体が明らかとなる。更に透析予防指導における看護の課題解決に必要な支援の明確化を積み重ねていくことは、透析予防指導における看護の質向上のための支援システムの構築のための重要な資料となると考える。透析予防指導における看護の質向上は、糖尿病透析予防に大きく貢献できると考える。

研究成果の概要（英文）：From the actual survey of nursing in diabetes dialysis preventive guidance, it was suggested that it is necessary to more concretely examine the necessity of enhancement of diabetes dialysis preventive guidance in regional clinics and the importance of medical cooperation. The following items were suggested as the necessary support for solving nursing problems in diabetes dialysis prevention guidance: Clarification of difficulties in daily nursing and problems of the nurse himself, Introduction of resources that support the solution of problems that nurses have, Promotion of reflection through case studies related to difficulties and issues in daily nursing, Clarification of issues for each research participant, Support for clarifying and sharing organizational goal settings, Support for correction, re-planning and execution of intervention plans when problem solving does not proceed smoothly.

研究分野：臨床看護学

キーワード：糖尿病透析予防指導 慢性病看護学 アクションリサーチ 看護

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

2012年度の診療報酬改定により、「糖尿病透析予防指導管理料」(以下、指導管理料とする)として、透析予防の活動が評価されるようになった。全国においても、この指導管理料が導入されてからの各施設における糖尿病透析予防指導(以下、透析予防指導)への取り組みについての報告が増えてきているが、指導管理料が認められてから、いまだ現場の実践の状況についての全国的な調査報告はまだ見られていない。

研究代表者は、透析予防指導における看護の実態について焦点を当て、岩手県全域の透析予防に携わる医療機関についての実態を把握する目的で、現在先行して研究を進めてきた。

今後の研究においては、調査地域を全国へ広げ、全国的な透析予防指導における看護の実態と課題について明らかにし、透析予防指導における看護の質を向上させるための支援のあり方について検討していきたいと考えている。その足がかりとして、本研究では、まずA、B県において調査を実施し、実態と課題を明らかにする。そして、岩手県の調査とA県の調査の結果について比較検討を行う。

岩手県は、県内の医療体制に地域格差が見られ、比較的医療資源に乏しい地域である一方、A県は比較的医療資源に富んだ地域である。看護に関してもA県は糖尿病看護認定看護師の数が岩手県の10倍以上と、岩手県に比較すると、糖尿病看護において、より先進的な看護が実践されていることが見込まれる地域である。B県については、A県と比較すると、糖尿病看護認定看護師の数は下回るが、岩手県よりは医療資源が上回る地域である。

以上の経緯から、本研究では、A、B県の透析予防指導における看護の実態調査を実施し、A、B県の透析予防指導における看護の実態と課題を明らかにすることを第1の目的としている。また、この調査結果をもとに、A県と岩手県の透析予防指導における看護に課題を抱えている2施設を対象に、各施設の課題解決へ向けたアクションリサーチを実施し、課題解決の過程を明らかにしたいと考えている。そして、2施設のアクションリサーチの成果を分析し、課題解決に必要な支援を検討することを目的としている。本研究において、アクションリサーチの手法を用いる根拠として、アクションリサーチは、看護実践が行われている「場」全体を捉えて、そこで働く看護者たちが問題と思う状況に改善をもたらすために、その状況にかかわっている人々のあいだに終わることのない学習サイクルを活性化させる方法であり(野口2004)、前調査において明らかとなった複雑な透析予防指導における看護の課題解決への取り組みの方法として適していると判断したからである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は以下の2点である。

- 1) A、B県の透析予防指導における看護の実態調査を実施し、A、B県の透析予防指導における看護の実態と課題を明らかにする。
- 2) 1)の調査結果をもとに、A県と岩手県の透析予防指導における看護に課題を抱えている2施設を対象に、各施設の課題解決へ向けたアクションリサーチを実施し、課題解決の過程とアクションリサーチの成果を分析し、課題解決に必要な支援を検討する。

## 3. 研究の方法

目的1) A県の糖尿病透析予防指導管理料を算定している施設を対象に透析予防指導における看護の実態についてのアンケート調査を行う。

### 研究デザイン

質問紙調査による量的研究である。

### アンケート調査用紙の作成

岩手県の調査との比較を行うため、研究代表者が岩手県で行った調査に使用したアンケート調査用紙の質問項目と同様の項目を本研究のアンケート調査用紙でも使用した。(アンケート項目: 研究対象者の所属施設の概要(外来患者数、1月あたりの糖尿病患者数、1月当たりの糖尿病性腎症患者数、施設規模、設立主体、糖尿病看護関連の有資格者の有無、透析予防指導の状況、成果、糖尿病透析予防指導管理料に関わる状況(算定状況、認知度)、指導の必要性和認識、糖尿病透析予防指導や診療報酬算定制度に関する自由記載項目)

### アンケート調査の実施

対象者: A県、B県における糖尿病透析予防指導管理料を算定している施設の透析予防指導に主に携わっている看護師(A県657件、B県205件/計862件)

対象者の募集方法: 上記の医療機関の施設長、看護部長宛に本研究、調査の趣旨と、透析予防指導に主に関わる看護師の紹介についての依頼文を送付する。研究の趣旨に同意があった場合に、のアンケート用紙を対象スタッフ(看護師1名)へ配布し、対象スタッフがアンケート調査票に記入し、返送してもらうこととする。返送をもって、本研究への協力に同意を得たこととした。

調査期間: 2018年1月~3月

分析方法: 質問紙で得られたデータは、質問項目ごとに記述統計を用い分析した。

自由記述部分については、記述の内容からコード化し、類似している内容を共通性に沿ってカテゴリー化を行った。

目的2) 研究協力が得られたA、B県の透析予防指導に課題を抱える2施設に対して、各

施設の透析予防指導における看護の課題を解決するためのアクションリサーチを実施する。

#### 研究デザイン

アクションリサーチを用いた質的記述的研究である。研究者と研究協力者が、研究協力者が所属する施設の糖尿病透析予防指導における看護の課題解決に向けたアクションリサーチを実施し、課題解決の過程とアクションリサーチの成果を質的に分析し、課題解決に必要な支援を検討した。

#### アクションリサーチの計画

i.すでに研究の同意を得ていたA、B県の糖尿病看護認定看護師2名に、本研究の趣旨説明および、各対象の所属施設の糖尿病透析予防指導における看護の課題についてヒアリングの場を設け、アクションリサーチの方向性を検討した。

・A,B2施設の糖尿病透析予防指導における看護の課題についてのアクションリサーチ計画を、A,B県の糖尿病看護認定看護師と研究者2名で検討する機会を設けた。

途中でB県の糖尿病看護認定看護師から研究協力の辞退の申し入れがあり、急遽、岩手県の糖尿病透析予防指導を行っている施設に研究協力依頼を申し入れ、協力を同意が得られたため、A県と岩手県の2施設の糖尿病透析予防指導における看護の課題解決に向けたアクションリサーチ計画を立案した。計画立案の過程で、研究協力者への個別のインタビューを行い、当該施設における透析予防指導における看護の課題を明確化した。

#### 研究参加者

A県の糖尿病看護認定看護師1名と、岩手県の糖尿病透析予防指導を行っている施設で本研究への協力を承諾した1施設(クリニック)の糖尿病透析予防指導に携わる看護スタッフ6名。すべての参加者には、本研究の趣旨についての同意・説明文書を口頭で説明した上で、同意を得た。

#### 研究期間

2016年4月～2020年1月

#### データ収集・分析

データは、研究会議の過程を許可を得て録音テープに収録した内容の逐語録、対象者への個別のインタビュー内容の逐語録、介入へのアンケート内容とした。対象者への個別インタビューについては、介入の前後で実施した。インタビュー内容は介入前は、糖尿病透析予防指導における看護の課題と本アクションリサーチによって取り組みたいこと、アクションリサーチの達成目標について、思いつくものを自由に語ってもらった。介入後は、アクションリサーチによる介入前後で変化したこと、意味があったと考えられること、難しかったことについて、自由に話してもらった。データ分析は、以上のデータについて、アクションリサーチによる介入内容、介入前後の変化(各施設・対象者ごと)について、類似性にもとづいてカテゴリー化した。

#### 3) 倫理的配慮

本研究計画は、岩手県立大学研究倫理審査委員会とA病院倫理審査委員会の承認を得て実施した。

#### 4. 研究成果

##### 目的1)

アンケートの回収数は69(A県48件、B県21件)(回収率8.0%)

研究の当初は、医療資源の地域格差が大きい岩手県と医療資源が豊かな県を含むA、B県の結果を比較し、3県の結果から全国的な糖尿病透析予防指導の現状と地域性による透析予防指導の現状について検討しようと考えていたが、本調査の回収率が著しく低かったため、有効な統計分析ができなかった。しかし、糖尿病看護認定看護師・慢性疾患看護専門看護師を有する施設を対象とした透析予防指導管理料算定の実態調査についての先行研究の結果と糖尿病患者の診療に携わる施設を広く対象とした本調査の結果に透析予防指導の実態についての大きな隔たりが出たことにより、地域の診療所等における糖尿病透析予防指導の充実の必要性や医療連携の重要性についてより具体的に検討していく必要性について示唆された。

##### 目的2)

1)各対象者の糖尿病透析予防指導における看護の課題解決に向けたアクションリサーチ計画の立案

A氏(A県糖尿病看護認定看護師)の糖尿病透析予防指導の所属施設における状況と検討された課題

A氏は、地域の中核病院の病棟勤務。糖尿病看護認定看護師の資格を有し、病棟での看護の他に、認定看護師の活動日として、毎週月曜日、外来において、専門外来、フットケ

ア外来の担当も担っている。研究者と A 氏との研究会議、日本糖尿病医療学学会における講演内容、プロセスレコードによる関わりの振り返りと研修会における事例発表を通して、A 氏自身の所属施設における糖尿病看護認定看護師としての立ち位置を改めて考える中で、A 氏に対しては、個別のアクションリサーチ計画を以下の通り、立案することとした。

#### アクションリサーチの目標

A 氏自身が、日々の患者との関わりに自信が持てるようになることを目的とした事例研究に取り組み、学術集会等で公表をすること。事例研究の取り組みにより、A 氏の自信が向上すること。

#### アクションリサーチ計画

研究に取り上げる事例の選定 事例研究の方法の検討 事例の検討の積み重ね 関連学会での報告、公表 計画終了後の A 氏へのインタビュー

#### 施設 B の糖尿病透析予防指導の所属施設における状況と検討された課題

施設 B は、地域の糖尿病医療を中心に担っているクリニックである。クリニックには糖尿病患者を診療する外来や透析施設も併設されている。これまでの透析予防指導を担当する看護スタッフは限定されており、今後は、透析予防指導を担当するスタッフを拡充すること、スタッフを拡充する上で、可能な限り、指導の質の均質化を目標にアクションリサーチに取り組みたいという意向から、施設 B のアクションリサーチの目標は以下の通り設定した。

#### アクションリサーチの目標

透析予防指導を担当する可能性のある看護スタッフが透析予防指導を担当する上での知識、技術を獲得することができる。

#### アクションリサーチ計画

対象者個々が考える課題抽出のための個別インタビュー 糖尿病透析予防指導に関する学習会の開催(全2回) 事例検討会の実施(全2回) アクションリサーチ終了後の個別インタビュー

## 2) アクションリサーチ計画の実施・成果

### A 氏(A 県糖尿病看護認定看護師)

A 氏が長期に渡り継続して関わりを続けている C 氏の事例をもとに、これまでの A 氏の C 氏への関わりを振り返り、C 氏に必要なケアを研究者と A 氏で検討を重ねた。

事例の検討を通して、A 氏は、事例検討を始めた当初、「自分の中で、これで良いのか、もっと自分が何かやらなきゃいけないこと、やれることがあるんじゃないか、違う関わりが出来たら、C 氏がより人生に対しての希望を見出せることにつながるのではないか」という思いが強く、自分自身の関わりに自信が持てずにいた。しかし、事例の検討の積み重ね、事例を学会発表し、発表の場での講評で得た座長からの「足は土台、A 氏がフットケアを通して、C 氏の主体性を育む関わりをしていた」という言葉から、C 氏との関係を距離を置いて客観視できるようになり、C 氏の頑張りに気づけるようになった。また、アクションリサーチ計画を進める中で、A 氏自身は、患者に対する見方について「やるべきことをやっていない(患者)」から「この人(患者)にとって、出来ることをやっていく」という見方に变化したこと、一人の患者への長期的な関わりを振り返ることで、自身が行ってきた看護を認めることにつながり、自信がついた、「患者個々と振り返りをしながら関わるのが重要」であることに気づいたこと、日々のケアの振り返りも「最初は誰かが一緒にやってくれないとだめなことばかりを振り返り、うまくいかなかったが、徐々に振り返る中で、一人でも効

果的に振り返りができるようになったと感じる」ようになっていた。「今は、アクションリサーチをはじめた時より視野が広がり、手ごたえを感じるできるようになった」。看護記録の内容について、「どうかかわって、患者さんがどのように反応したのか」を記載することによって「他のスタッフにも伝わるし、自分自身の振り返りにもなる」ことなど、A氏自身の変化が語られた。

#### 施設 B

施設 B へは、アクションリサーチの目標を共有した後、研究参加者個別に糖尿病透析予防指導に対する思いに関する個別のインタビューを行い、より、具体的な計画へと落とし込む手続きを進めた。個別のインタビュー結果より、明らかとなった課題の解決に向けて、介入方法を特定し、アクションリサーチ計画を進めて行った。

アクションリサーチ介入後のインタビューでは、「腎症患者さんに関わる抵抗感がなくなった」「腎機能を確認する視点を持てるようになった」「2期の可逆的な時期に進行を食い止めようという認識をもって患者に当たれるようになった」「腎症の患者さんのアセスメントができるようになった」「事例検討会を通して、患者の病態だけを見るのではなく、患者をトータルにみていくことの重要性について再確認できた」「他スタッフの関わりの実際が見えたこと、他スタッフの関わりの実際を共有することで気づくこともあり、参考になった」「外部の研究者が介入することで、いつものスタッフ間での話し合いの方向性が適切だったのかの再確認ができた」等の肯定的な意見が聞かれた一方で、「より、自分自身の学習や研さんの必要性を痛感した」「学習会直後は分かったような気がしていたが、しばらくその知識を使っていないと忘れてしまう」「実際に知識を使ってケアを実践してみないとわからない」という、更なる対象者個々の課題への気づきや、知識だけでは不十分であり、実践を通して、技術を身に付けていく必要性についても意見が出された。「部門・職種間の連携」については、「透析部門との連携が強化できた」「患者の外来診察にできるだけ同席するようになった」「Dr との診療方針やケアの方向性の共有、共通理解の必要性を痛感しているがなかなか(実現が)難しい」という意見が出された。今後の課題として、今回、施設 B のアクションリサーチの目標については、対象スタッフへ透析予防指導についての知識やイメージの獲得にはつながったものの、実際に介入するスタッフの拡充には至らなかった。その理由として、対応するスタッフの知識や心構え等の準備体制は整い始めたものの、介入するスタッフが拡充することにより、介入の質を均質にするための資材の吟味や、介入状況の共有方法の検討、スタッフ間における連携のイメージをより具体的に描く必要性について、これまで指導に携わっていたスタッフから課題が表出されたこと、施設の繁忙期や現場の流動的な状況により、目標達成までのプロセスが計画的に十分進まなかったことも理由と考えられた。

#### 3) アクションリサーチを通して明らかとなった、糖尿病透析予防指導における看護の課題解決に必要な支援

本研究における結果を通して、糖尿病透析予防指導における看護の課題解決に必要な支援については、対象個別の支援と施設や組織を対象とした支援の 2 つの支援に大別されると考えられた。対象個別の支援は、日々の看護における困難や看護者自身の課題の明確化、看護者が抱える課題解決を支えるリソースの紹介、日々の看護における困難や課題に関わる事例検討等を通したリフレクションの促進、施設や組織を対象とした支援は、複数いる研究参加者個々の課題の明確化、組織の目標設定の明確化と共有の支援、課題解決がスムーズに進まない場合の介入計画の修正、再立案、遂行のサポートが必要であることが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 渡邊 真智子、土屋 陽子、藤澤 由香
2. 発表標題 患者との関わり方を見失う時
3. 学会等名 第6回日本糖尿病医療学学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	土屋 陽子  (Tsuchiya Yoko)  (30125942)	弘前学院大学    (31104)	